

厚生労働科学研究費補助金
感覚器障害研究事業

日本各地の手話言語に関するデータベースの作成

平成17年度 総括・分担研究報告書

主任研究者 福田 友美子

平成18(2006)年3月

目 次

I. 総括研究報告	
日本各地の手話言語に関するデータベース	1
福田 友美子	
II. 分担研究報告	
1. 日本各地の手話言語に関するデータベースの作成 (東京地域の手話言語の収集および分析)	4
福田 友美子	
2. 京都地域の手話言語の収集および分析	11
大杉 豊	
3. データベースの作成に関する研究	13
森本 行雄	
III. 研究成果の刊行に関する一覧表	16
IV. 研究成果の刊行物・別刷	16

(別添 2)

I. 総括研究報告

厚生科学研究費補助金 (感覚器障害研究分野)

総括研究報告書

日本各地の手話言語に関するデータベースの作成

(東京地域の手話言語の収集および分析)

主任研究者：福田友美子 国立身体障害者リハビリテーションセンター

研究所聴覚言語障害研究室長

研究要旨

手話言語には、日本語のような音声言語と同様に、地域による違いや年代による大きな違いがあることが知られている。しかし、これまでわが国において、地域や世代による違いについては、いくつかの地域で手話表現を収集することが試みられているだけで、分析的・総合的な研究は実施されてこなかった。そこで、本研究では、日本各地の地域や年代による手話表現の違いを明らかにすることを目的にした。そのために、研究の初年度(平成 17 年)は、次の 2 箇所で、次のような研究を実施した。

①東京地域：20 歳台から 70 歳台の広い世代のろう者 14 名を対象に、約 50 分くらいの手話表現を収録し、使用単語を調べ上げ、単語の使用状況を調べた。さらに、東京地域の在住の 30 歳台のろう者の手話言語を中心に作製してある電子辞書(掲載単語 250 語、語義別例文 1500 文)を活用して、高齢ろう者で使用される単語の種類や語法がどのように若い世代と違うか、分析・整理している(現在、進行中)。②京都地域：東京地域と同様な研究を実施している。現在のところ、70 歳の 2 名のろう者の手話表現を収録し、分析している。今後、対象者を増やす予定。

以上の研究で得られた結果を、研究の最終年度に、ビデオ動画を含んだデータベースにまとめる。

A. 研究目的

ろう者が一般の社会に参加していくためには、一般社会で行われている音声によるコミュニケーションをろう者にも十分に理解できるように、情報保障することが不可欠となる。国際的にも情報保障は、ろう者の基本的な権利として認められている。そのためには、適切な手話通訳は不可欠である。しかし、手話言語は、日本語のような音声言語と同様に、地域による違いや年代による大きな違いがあることが知られている。さらにろう者ではろう社会とのかかわりに個人差が大きいことから、その違いは音声言語よりも大きい可能性もある。また、特に高齢者では日本語の教育が十分

受けられなかったためにコミュニケーションをとりにくいものが多く、さらに手話通訳する上では高齢者の手話に関する知識の学習環境が整備されていないために通訳がむずかしことが、手話通訳養成上のひとつの課題者となっている。そこで、本研究では、日本各地の地域や高齢者の手話表現の違いを明らかにすることを目的にする。

そして、研究で得られた結果を、研究の最終年度に、ビデオ動画を含んだデータベースにまとめ、手話学習を行ううえで、教材として役立つものを作成する。

B. 研究方法

(1) ろう者の対話を対象にした研究

東京地域と京都地域に在住しているろう者を対象に、40～50分程度のろう者の2人に対談をしてもらい、手話表現を収録する。次に、この一連の対話を、単語レベルに区切り、出現している各単語にラベル付けをする。データベースソフトを用いてこの結果を整理し、単語毎に検索できるデータベースを作成し、つぎのように研究を実施する。

- ①. 使用頻度の高い基本単語を、地域や年代による違いも考慮に入れながら、調べる。
- ②. 使用頻度の高い単語について、特に地域の特性や高齢者の特性を考慮しながら、どのような語義をもっているか分析する。

(2) 東京地域の若いろう者の手話言語についての電子辞書（作成済）を活用した研究

「日本手話学習のための基本語彙を中心にした日本手話-日本語辞書の作成」（平成11～13年度厚生科学研究費補助金（感覚器障害及び免疫・アレルギー等研究事業（感覚器障害研究分野））の研究で、東京在住の30歳台のろう者を主体とした研究チームを作製して、基本単語250語・語義別例文1500文を掲載した電子辞書を作製した。この辞書に掲載してある単語や文の表現（ビデオ動画）を、京都在住のろう者や東京在住で高齢のろう者にみてもらって、地域や年代によって異なる手話表現の違いについて、ろう者に詳細なインタビューを実施し、単語の語義別に違いを整理し、手話言語の時間的な変化について検討する。

C. 結果と考察

(1) ろう者の対話を対象にした研究

東京地域の研究結果では、高齢ろう者の手話言語を若いろう者のものと比較した研究で、両者の間で使用頻度に違いがある単語があることがわかった。それらにあたる単語は、例えば「意味」や

「オーバー」などで、それらは若いろう者では使用頻度が高いが、高齢者では高くない。これらの単語は、世代によって語法が異なっていて、そのために使用頻度に差が生じていると思われる。平成18年度は、このような観点から手話単語を選択し、選択された手話単語の語義や語法を分析・整理していく。これらの単語は時間的に語法が変化した単語であると考えられる。変化していく上で、変化が生じやすい何らかの言語上での問題があった可能性がある。東京地域でのこれらの結果を踏まえて、平成18年度は、京都地域で、これらの単語の使用状況や年代による違いなど調査する。

京都地域で研究が進展し、研究結果がでてきたところで、地域差について整理をおこなう。

(2) 東京地域の若いろう者の手話言語についての電子辞書（作成済）を活用した研究

電子辞書で掲載している例文を、東京地域に在住している70歳代のろう者にこれを見てもらい、高齢のろう者のもちいている手話表現との違いを詳細にインタビューしたところ、変化しているものの多くは、従来の単語の語法にあらたに新しい使用方法が付け加わるものがおおかった。さらに、文の構造自体も変化してきているような印象をうけることがあった。今後データベースにまとめる。

同様の研究を平成18年度に京都地域で実施し、地域によって異なる単語とその語法を検討し、さらに、地域差と年代差について関連があるかどうかなど、検討したい。

(3) データベースの作成に関連して

本研究では、東京地域と京都地域の2箇所、年代や地域による手話表現の違いに関する研究が進行している。平成17年度の本研究で実施した経過から、高齢のろう者の手話言語での語法および文構造の基本的なものをあらかじめできる目処がついた。平成18年度に同様の手法を用いて研究を継続すれば、地域差についても基本

(別添 3)

的な語法などについてあきらかにできる可能性がある。以上のことを踏まえると、平成11～13年度厚生科学研究費補助金（「日本手話学習のための基本語彙を中心にした日本手話-日本語辞書の作成」で作成したデータベースソフトを修正しながら利用できると考えられる。ただし、今回の研究で明らかにする予定である①地域の違い②年代の違いについてインデックスを設けるとともに、説明画面で学習者にわかりやすくするための詳しい説明をつく加えることにする。高齢ろう者に特有の手話言語表現や京都地域の手話表現などについては、新たに手話表現のビデオ動画ファイルを作成する必要がある。そこで、平成17年度はそのための手話撮影やファイル作成などの準備を実施した。

D. 結論

本研究では、日本各地の地域や年代による手話表現の違いを明らかにすることを目的にした。そのために、研究の初年度(平成17年)は、次の2箇所、次のような研究を実施した。

①東京地域：20歳台から70歳台の広い世代のろう者14名を対象に、約50分くらいの手話表現を収録し、使用単語を調べ上げ、単語の使用状況を調べた。さらに、東京地域の在住の30歳台のろう者の手話言語を中心にして作製してある電子辞書（掲載単語250語、語義別例文1500文）を活用して、高齢ろう者で使用される単語の種類や語法がどのように若い世代と違うか、分析・整理している（現在、進行中）。②京都地域：東京地域と同様な研究を実施している。現在のところ、70歳の2名のろう者の手話表現を収録し、分析している。今後、対象者を増やす予定。

以上の研究で得られた結果を、研究の最終年度に、ビデオ動画を含んだデータベースにまとめる。

E. 研究論文発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

F. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案特許
3. その他 なし

(別添 3)

II 分担研究報告

1. 日本各地の手話言語に関するデータベースの作成 (東京地域の手話言語の収集および分析)

厚生科学研究費補助金 (感覚器障害研究事業) 分担研究報告書

日本各地の手話言語に関するデータベースの作成 (東京地域の手話言語の収集および分析)

分担研究者：福田友美子 国立身体障害者リハビリテーションセンター
研究所聴覚言語障害研究室長

研究要旨

東京地域に在住している 20 歳台から 70 歳台の広い世代のろう者 14 名を対象に、約 50 分くらいの手話表現を収録し、使用単語のラベルを調べ上げ、まず、各単語の使用頻度を調べた。さらに、東京地域の在住の 30 歳台のろう者の手話言語を中心にして作製してある電子辞書 (基本単語 250 語、語義別例文 1500 文を掲載) を活用して、高齢ろう者で使用される単語の種類や語法がどのように若い世代と違うか、分析・整理している (現在、進行中)。

A. 研究目的

手話言語には、日本語のような音声言語と同様に、地域による違いや年代による大きな違いがあることが知られている。しかし、これまでわが国において、地域や年代による違いについては、いくつかの地域で手話表現を収集することが試みられているだけで、分析的・総合的な研究は実施されてこなかった。そこで、本研究では、日本各地の地域や年代による手話表現の違いを明らかにすることを目的にした。また、特に高齢者では日本語能力が低いものがおおいいためコミュニケーションをとりにくいものが多く、さらに手話通訳する上では高齢者の手話についての知識が乏しいため通訳がむずかしことが手話通訳者の大きな悩みとなっている。高齢者の手話表現を明らかにすることは、緊急の課題となっている。そこで、本研究では高齢者の手話言語についてその特徴をあきらかにすることも目的とした。

B. 研究方法

① 研究の初年度である平成 17 年度には、東京地域に在住している 20 歳台から 70 歳台の広い世代のろう者 14 名 (表 1) を対象に、40~50 分程度のろう者間の 2 人対談をしてもらい、約 50 分間の手話表現を収録した。次に、この一連の対話資料を、単語レベルに区切り、出現している各単語にラベル付けをした。この分析には、手話言語を母国語としている幼児期から手話言語環境で育ったろう者があたった。データベースソフトを用いてこの結果を整理し、単語毎に検索できるデータベースを作成した。研究年度第 2 年度の平成 18 年度以降は、これを利用して、つぎのように研究を実施する。

- (1). 使用頻度の高い基本単語を、年代による違いも考慮に入れながら、調べる。
- (2). 使用頻度の高い単語について、特に高齢者について、どのような語義・語法をもっているか分析する。
- (3). 高齢者に独特の単語の使用法の場合、例文を作

成する。

(4) 高齢のろう者に対するインタビューなどを通じて、頻繁に使用される表現であるにもかかわらず、所持している資料にその例がないことがわかった場合には、その単語や用法について、(2)(3)の作業に付け加える。

さらに、「日本手話学習のための基本語彙を中心にした日本手話-日本語辞書の作成」(平成11～13年度厚生科学研究費補助金)(感覚器障害及び免疫・アレルギー等研究事業(感覚器障害研究分野))の研究で、東京在住の30歳台のろう者が主体とした研究チームを作製して、基本単語250語・語義別例文1500文を掲載した電子辞書が作製してある。この辞書に掲載してある単語や文の表現(ビデオ動画)を、高齢のろう者にみてもらって、年代によって異なる手話表現の違いについて、高齢のろう者に詳細なインタビューを実施し、単語の語義別に違いを整理し、手話言語の時間的な変化について検討する。

C. 結果と考察

(1) ろう者の対話を対象にした研究の結果

14名のろう者の対話で拾い上げられた単語のラベルの数を、表2に示した。表2に、拾い上げられた単語の種類を、手話単語が表現される手型別に示した。手話言語で使用される手型の種類の分類には様々な考え方があるが、今回、我々は表2にあげたように分類した。手話言語の単語は、手話言語の音韻の1種である手型であらわされるが、その使用頻度には大きな違いがあるとたびたび指摘される。今回の分析で、使用頻度の多い手型がなにかを客観的に示すことができた。

また、使用頻度の高い単語について見てみると、たとえば手話単語「意味」や「オーバー」は若いろう者では使用頻度が高いが、高齢者では高くない。これらの単語は、世代によって語法が異なっていて、そのために使用頻度に差が生じていると思われる。平成18年度は、このような観点から手話単語を選

択し、選択された手話単語の語義や語法を分析・整理し、データベース化する。

それぞれの対象者について、30分あたりでの対話での総単語数と単語の種類について、分析が集計しているものだけについて、その結果を表3に示した。ろう者が日常会話のなかでどのくらいの量の単語の種類をつかっているかなど、これまで客観的な資料がほとんどなかった。ここでの結果からみると、高齢のろう者のほうが多くの種類の手話単語を使用しているように思われるが、今後、その実態や原因などを検討していきたい。

(2) 電子辞書を使っての高齢のろう者へのインタビュー

電子辞書で掲載している例文は、東京在住の30歳台くらいの若い世代のろう者が相談して作成した。そのために、若い世代の手話言語の表現が多用されている結果となっている。70歳代のろう者にこれを見てもらい、高齢のろう者のもちいている手話表現の違いを詳細にインタビューした。その結果、従来の単語の語法にあらたに新しい使用方法が付け加わるものがおおかった。さらに、文の構造自体も変化してきているような印象をうけることがあった。表4に、手話単語「得意」を例にして、そのような例を載せた。「得意」の手話単語は、使用頻度の高い重要単語であるが、70歳台の高齢ろう者と若い世代でその語法が異なっていて、変化してきたことが伺える。そして、新しい語法が生まれてくる要因となった単語(現在では、使用されていない)が存在していた様子も伺える。平成18年度に、基本単語についてこのような単語の使用法の変化を整理しデータベース化する予定である。最終的には、現在所持している電子辞書にその結果を取り込んで、学習者に提供できるようにしたい。

D. 結論

ろう者の対話を対象にした研究を実施したところ、次のことがわかった。

① 14人のろう者の30分くらいの日常会話で使用

(別添 3)

されていた単語の種類はのべ数は、1700 語以上にのぼっていた。

- ② 手話単語の構成要素の 1 種である手型別に単語を分類すると、手型の使用頻度にはおおきな偏りがあった。
- ③ 高齢のろう者のほうが、使用する単語の種類が多ような傾向がみられた。

以前の研究（「日本手話学習のための基本語彙を中心にした日本手話- 日本語辞書の作成」（平成 11～13 年度厚生科学研究費補助金（感覚器障害及び免疫・アレルギー等研究事業（感覚器障害研究分野）））で作成した電子辞書を活用して、高齢のろう者にたいして手話言語の違いをインタビューし

た研究から、次のことがわかった。

- ①従来の単語の語法に、あらたに新しい使用方法が付け加わる変化がおおかった。
- ②さらに、文の構造自体も変化してきているような印象をうけるものがあった。

E. 研究論文発表

- 1. 論文発表 なし
- 2. 学会発表 なし

F. 知的所有権の取得状況

- 1. 特許取得 なし
- 2. 実用新案特許
- 3. その他 なし

表1. 収録したろう者のプロフィール

70 歳台	3 名
60 歳台	2 名
50 歳台	2 名
40 歳代	1 名
30 歳台	3 名
20 歳台	3 名

表2. 拾い上げたラベルの種類 (手型別)

イ	ウ	エ	オ	キ	ク	ケ
24 種	29 種	25 種	69 種	7 種	307 種	45 種
サ	シ	タ	チ	テ	ニ	ヌ
137 種	21 種	89 種	2 種	260 種	83 種	23 種
ヒ	メ	モ	ヤ	レ	レ(曲)	ロ
298 種	67 種	68 種	85 種	41 種	19 種	41 種
		顔だけの表現				
中指	ILY					
4 種	1 種	3 種				

(別添 3)

表 3. 30 分あたりの対話で発せられた単語の総単語数と，単語の種類の数

対象者のプロフィール	単語の総数	単語の種類数
70 歳台	2062	567
60 歳台	2625	473
60 歳台	2649	599
40 歳台	1465	326
30 歳台	2675	399
30 歳台	1357	352
20 歳台	1363	322
20 歳台	2012	408
20 歳台	1754	377

(別添 3)

表 4. 高齢ろう者と若い世代のろう者の単語の用法の違いの例

得意 [1] できる, 得意

例 1 「何」で, このような用法は高齢ろう者は, つかわない。

下 or 前	額
得意	勉強 何 英語
	上
トイ or	ベンキョウ た エゴ

訳：得意な科目は英語です。

注：「できる」, 「得意」の意味。口型「一」が伴っている時は, 「大变得意」の意味。

[2] どうして

例 2 「得意 (口形 ポが伴う)」の用法は, 高齢ろう者はつかわない。高齢ろう者では, 手型「サ」で 「ポ」が伴う同じ意味で使われる単語がある。

横ふり	額	上→下→戻
A: 結婚 得意	B: 自然 バレー 同じ	会う 意味
上→		
丸→		
ポ	シ ^ン バレー 村ジ	パ ミ

訳：A：結婚のきっかけは？（どうして結婚したの？）。 B：自然にそうなの。二人ともバレーをされていてそこで出会ったの。

注：「どうして」「どうやって」の意味。口型を「ポ」を伴う。首横ふりを伴うWH疑問のプロソディ表現が付帯する。

例 3 「のに」は, 高齢のろう者は使わない。

上→下	前	額
A: 駅 遠い のに 行く (ヒ上) (2→1) 得意 PT-2	B: タクシー PT-1	
上	ル	
キ トイ に	ポ or ホ	

訳：A：駅まで遠いのにどうやって行くんですか？ B：タクシーで行きます。

(別添 3)

[3] 自慢 高齢のろう者では、自慢の意味では「得意」はつかわない。例4-Aを用いるのが、普通。

例4

前	上	下 → 戻
料理	なんでも	できる 得意 思う PT-3
リョウリ	ナンデモ	デキル ○ カンジ

訳：あの人は料理が何でもできると鼻にかけているみたい。

注：「自慢」の意味。顔の表情に注意。

類義語：/自慢/

例4-A *類義語/自慢/を用いた例文

前	上	下 → 戻
料理	なんでも	できる 自慢 思う PT-3
リョウリ	ナンデモ	デキル ○ カンジ

訳：あの人は料理が何でもできると鼻にかけているみたい。

2. 京都地域の手話言語の収集および分析

厚生科学研究費補助金（感覚器障害研究事業） 分担研究報告書

京都地域の手話言語の収集および分析

分担研究者：大杉 豊 全日本ろうあ連盟日本手話研究所
事務局長

研究要旨

京都地域の手話言語の基本的な文法表現や基本的な単語の語法を調べるために、京都地域に在住し、京都市ろう学校を卒業したろう者を対象に、約 50 分くらいの手話表現を収録した。今後、使用単語のラベルを調べ上げ、まず、各単語のラベルを確定し、各単語の使用頻度を測り、単語の語法などについて、整理および分析を行う。

A. 研究目的

手話言語には、日本語などの音声言語と同様に、地域や年代による違いが見られることが知られている。しかし、これまでわが国において、地域や世代による違いについては、いくつかの地域で手話表現を収集することが試みられているだけで、分析的・総合的な研究は実施されてこなかった。そこで、本研究では、日本各地の地域や年代による手話表現の違いを明らかにすることを目的にした。

本研究では、京都地域の手話言語について、基本的な文法表現や基本的な単語の語法を調べることを目的にしている。また、東京地域で使われている手話言語とのちがいについても研究する。

B. 研究方法

① 京都地域に在住し、京都市ろう学校を卒業したろう者 2 名（表 1）を対象に、約 50 分くらいの手話表現を収録した。図 2 にこの収録の様子をしめた。この一連の対話資料を、単語レベルに区切り、出現している各単語にラベル付けをしている

（現在分析中）。この分析には、手話言語を母語として幼児期から手話言語環境で育ったろう者があっている。データベースソフトを用いてこの結果を整理し、単語毎に検索できるデータベースを作成し、今後の研究で利用する。

② 「日本手話学習のための基本語彙を中心にした日本手話-日本語辞書の作成」（平成 11～13 年度厚生科学研究費補助金（感覚器障害及び免疫・アレルギー等研究事業（感覚器障害研究分野））の研究で、東京在住の 30 歳台のろう者が主体とした研究チームにより、基本単語 250 語・語義別例文 1500 文を掲載した電子辞書が作製されている。この辞書に掲載してある単語や文の表現（ビデオ動画）を、京都在住で京都市ろう学校を卒業しているろう者にみてもらって、東京地域と京都地域間で、異なる手話表現の違いについて、京都在住のろう者に詳細なインタビューを実施し、単語の語義別に違いを整理し、手話言語の地域による違いについて検討する。これは、平成 18 年度に実施する。

京都はろう教育の発祥の地とされ、京都で発生した手話言語が日本全体の手話言語形成に中心的な

(別添 3)

役割を果たしたことが推察されている。京都の手話が、東京の手話に影響を与えた可能性があるという仮設的なものも考慮に入れながら分析を進める。

C. 結果と考察

現在、研究が進行しているところで、まだ報告できる結果はでていない。

D. 結論

京都地域に在住し、京都ろう学校を卒業したろう者2名(表1)を対象に、約50分くらいの手話表現を収録した。この一連の対話資料を、単語レベルに区切り、出現している各単語にラベル付けをしている(現在分析中)。データベースソフトを用いてこの結果を整理し、単語毎に検索できるデータベースを作成し、今後の研究で利用する。

平成18年度に、「日本手話学習のための基本語彙を中心にした日本手話-日本語辞書の作成」(平成11~13年度厚生科学研究費補助金(感覚器障害及び免疫・アレルギー等研究事業(感覚器障害研究分野))の研究で作成した東京地域の手話言語の電子辞書を活用して、東京地域と京都地域間で、異なる手話表現の違いについて、研究を実施する。

E. 研究論文発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

F. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案特許
3. その他 なし

表1 収録したろう者のプロフィール

70歳台	2名
------	----

(別添 3)

3. データベースの作成に関する研究

厚生科学研究費補助金（感覚器障害研究事業） 分担研究報告書

データベースの作成

分担研究者：森本行雄 聴力障害者情報文化センター
聴覚障害者情報提供施設所長

研究要旨

手話言語には、日本語のような音声言語と同様に、地域による違いや年代による大きな違いがあることが知られている。しかし、これまでわが国において、地域や世代による違いについては、いくつかの地域で手話の収集を実施することが試みられたりしているだけで、総合的な研究は実施されてこなかった。そこで、本研究では、日本各地の地域や年代による手話表現の違いを明らかにすることを目的にする。本研究では、東京地域と京都地域の2箇所で、年代や地域による手話表現の違いに関する研究が進行している。これらの結果を手話言語学習者に活用できるよう、取り扱いが簡便で、顔の表情などの微細な手話表現がみやすい画像データベースの形式でまとめ、それらを収容したDVDを作成し、配布する。今年度は、研究の進捗状況を眺めながら、データベース構築のための準備を開始した。

A. 研究目的

手話言語には、日本語のような音声言語と同様に、地域による違いや年代による大きな違いがあることが知られている。しかし、これまでわが国において、地域や世代による違いについては、いくつかの地域で手話の収集を実施することが試みられたりしているだけで、総合的な研究は実施されてこなかった。そこで、本研究では、日本各地の地域や年代による手話表現の違いを明らかにすることを目的にする。本研究では、東京地域と京都地域の2箇所で、年代や地域による手話表現の違いに関する研究が進行している。これらの結果を手話言語学習者に活用できるよう、取り扱いが簡便で、顔の表情などの微細な手話表現がみやすい画像データベースの形式でまとめ、それらを収容したDVDを作成し、配布する。今年度は、研究の

進捗状況を眺めながら、データベース構築のための準備を開始した。

B. 研究方法

以前実施した「日本手話学習のための基本語彙を中心にした日本手話-日本語辞書の作成」（平成11～13年度厚生科学研究費補助金（感覚器障害及び免疫・アレルギー等研究事業（感覚器障害研究分野））の研究で、東京在住の30歳台のろう者が主体とした研究チームを作製して、基本単語250語・語義別例文1500文を掲載した電子辞書が作製してある。平成17年度の本研究で実施した経過から、高齢のろう者の手話言語での語法および文構造の基本的なものをあきらかにできる目処がついた（厚生科学研究費補助金（感覚器障害研究事

(別添 3)

業)分担研究報告書「東京地域の手話言語の収集及び分析」分担研究者:福田友美子 参照)。
同様の研究方法で,東京地域と京都地域の手話言語の表現の違いについても,明らかにできる可能性がある。そこで,平成11~13年度の研究で作成したのと同様のデータベース(電子辞書)プログラムを,多少修正しながら利用できると思われる。

C. 結果と考察

作成していくデータベースのフローチャートを図1に示した。検索の流れは,基本的に,平成11~13年度の研究で作成した電子辞書と同じである。ただし,今回の研究で明らかにする予定である①地域の違い ②年代の違い についてインデックスを設けるとともに,説明画面で学習者にわかりやすくするための詳しい説明をつく加えることにする。高齢ろう者に特有の手話言語表現や京都地域の手話表現などについては,新たに手話表現のビデオ動画ファイルを作成する必要がある。そこで,平成17年度はそのための手話撮影やファイル作成などの準備を実施した。
データベースの動作環境は,①本体:AT互換機 ②OS:Windows 2000, Windows Me, Windows 98 ③メ

モリ:128MB以上 ④CPU:Pentium III以上, PentiumIV推奨 の予定。

D. 結論

手話言語の地域や世代の違いを見ることができ
る手話動画のデータベースを作成するためのデータ
ベースの構造について,東京地区と京都地区の
研究の進捗状況を考慮にいれながら,計画した。
検索の流れは,基本的に,平成11~13年度の
研究で作成した電子辞書と同じにする。ただし,
今回の研究で明らかにする予定である①地域の
違い ②年代の違い についてインデックスを設け
るとともに,説明画面で学習者にわかりやすくす
るための詳しい説明をつく加えることにする。

E. 研究論文発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

F. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案特許
3. その他 なし

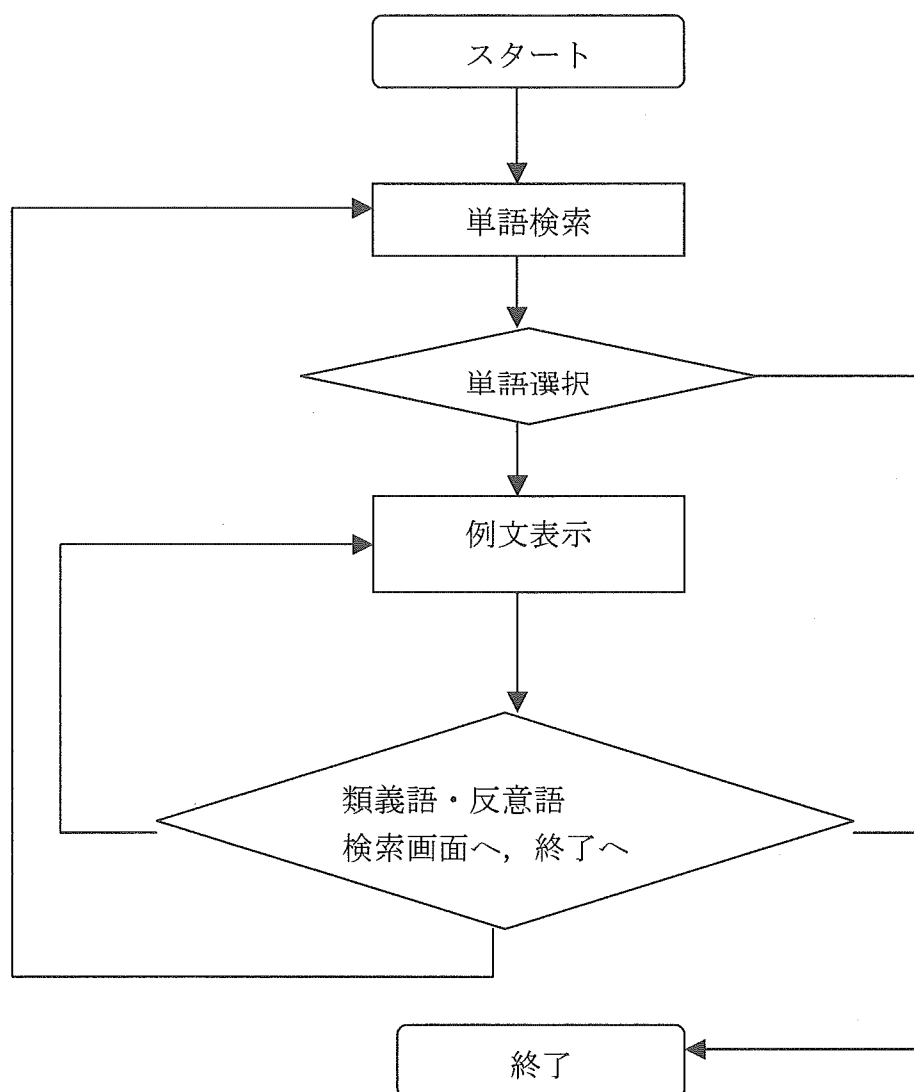


図1. 電子辞書の流れ

- ①単語の項目に, 東京地域・京都地域の区別を, インデックスとしていれる.
- ②単語の項目に, 高齢のろう者の手話言語の標識を, インデックスとしていれる.
- ③例文表示のページに, 本研究であきらかになった事柄を, 詳細に書きこむ.

別紙 4

III. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍 なし

雑誌 なし

IV. 研究成果の刊行物・別刷 なし